
天死専門学校

白猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天死専門学校

【Nコード】

N02130

【作者名】

白猫

【あらすじ】

天使と死神を育てる学校の話です！！

孤児の福永たくまは一通の手紙により、人生を180度回転させます。

相棒のロドノステラに振り回され、授業に振り回され、死神目指して頑張ります！！

（前書き）

大昔に書いたものなので、色々グシャグシャかも知れません・・・
でも、楽しんでいただけたら嬉しいです（^^）

地球。太陽系の中で最も美しいとされる星。

しかし、生き物の心は美しいのだろうか。人は皆、生まれる前に美しく生きることを神に誓う。

地球には悪魔、すなわち心を汚す化け物がいる。悪魔のせいで、人々は穢れた心を持ってしまふ。それを阻止するため、私は三人の天使と一人の死神を地球に送ることにした。そして、悪魔を駆除するため、生きている人間自身を天使、または死神に育てることにした。
神ゼウス

天使・死神専門学校

天使・死神専門学校。

ここは大昔に神ゼウスが作った専門学校。

悪を取り除くため、三人の天使と一人の死神をここの教師として送り込み、天使、または死神を育てている。しかし、天使や死神への道は険しく、才能の持ち主のみ卒業できる。そのため、天使や死神になれる生徒は一握りだけだった。

そんなある日の秋。

「今年は何人卒業できそうですか」

雪のように白いコートを着ている一人の男は、山のように積まれた書類を整理しながら、机の向こう側にいるもう一人の男に聞いた。しかし、男は振り向きもせず黙々と書類を片付けていた。

「相変わらず無口のようですね。それから、私の質問に答えていた

だきたい」

男は手を止めると、立ち上がり、机の前までやってきた。

「あのですね、いくらあなたが特別な存在でも、私を驚かせるようなことはしないでいただきたい。大体、そのフード、傷んだローブ、いい加減脱いでください。いつ見ても怖いです」

白いコートを身にまとった男の言う通り、もう一人の男の格好は、黒い痛んだローブに、顔を隠すためのフードを羽織るなど、どんな人も恐れる格好だった。ましてや、男の片手には大鎌が握られていた。

男は大鎌を高くかかげたかと思うと、一気に振り下ろした。鈍い音とともに、大鎌の刃は机にぐっさりと刺さった。

「ちょっと、何をしているんですか君は。私の机が君に何をしたら言うのです」

「何言ってるんですか。今年卒業出来るかもしれない生徒の名ですよ。それから名前で呼んでください。それじゃ、俺は退場させてもらいますよ。天使さん。いや、アルテミスよ」

男は机から大鎌を抜くと、さっさと部屋から出て行った。

「全く。鎌のおかげで書類に穴が開いてしまった。死神ベヒスは困った男だ」

アルテミスは、穴の開いた書類をゴミ箱に入れると、ベヒスが渡したメモ用紙に目を通した。そこには二桁にも足さない名前が雑に書かれていた。

「今年も卒業生は一握りだけですな」

アルテミスはため息をつく、引き出しから金色の文字で書かれた書類を取り出し、それを封筒に入れ、手のひらにそつと乗せた。

「いいですか。力の持ち主を探し出し、その人の家のポストに入るんだよ」

アルテミスがそう命じると、封筒はひとりでに動き出し、開いている窓から普通の人々が住む町へと飛んで行った。

町では、住民たちがいつも通りの生活を送っていた。そんな中、封筒は力の持ち主求め飛んでいた。そして、ようやくたどり着いた場所は、孤児院のポスト。役目を果たした封筒は、ポストの中であて先と名前を封筒に浮かび上がらせ、動かなくなった。

それと同時に、孤児の家から十六歳ほどの少年が現れた。そしてポストの中身をすべて取り出すと、さつさと家に入ってしまった。

「新聞は管理人さん、手紙は、僕」

少年は首をかしげた。そしてもう一度封筒に書かれた名前を見た。そこには、福永たくま様と、金色の文字で書かれていた。

「確かに僕はたくまだけど、なんで手紙なんかが来るんだらう」

そう言いながらも、たくまはその場で封筒を開いた。そして、手紙の内容を見るや否や、自分の部屋（他の孤児たちと一緒に）に飛び込んだ。

そこには、まだ寝ているチビや、ものすごい格好で爆睡している高

校生もいた。たくまが部屋に飛び込んだ際に起こした大きな音で起きた孤児も何人かいた。

「何の騒ぎだよ。たく兄、今日は日曜日だよ」

一人の少年は目をこすりながら起き上がると、たくまに枕を投げつけ、また眠りについた。

「それくらい知ってるよ。でもな、もう八時だ。さっさと起きて、掃除、洗濯、食事の準備をしないと」

「少しくらいいいじゃないか。どうせ行く所も、用事もないしさ」

二段ベッドの二段目で寝ていた寝癖のひどい高校生は、自分のパジャマを眠たそうに欠伸をしながらたくまに投げ渡した。

「洗濯物は自分で洗ってよ。それに、僕は急用が出来たんだ。だから今日は出かけるよ」

「たくまに用事とは、珍しいことも起こるもんだな。どこに行くんだ」

「うん。生物研究専門学校から推薦状が届いたんだ。僕の才能を認め、よろしければここに来てほしいって」

高校生はしばらくの間黙っていたが、また口を開いた。

「才能って、たくまの事を知ってるような手紙だな。俺たちは皆孤児院の孤児。学校もろくに行けないってねえのに、なんでそんなもんが届くんだ。やめとけ。ろくな学校じゃないぞ。きつと」

高校生はそう言うと、倒れるように横になり、いびきをかき始めた。たくまはその姿に呆れながら、部屋の隅にある大きなタンスを開けた。すると、中からたくさんの玩具や制服、鞆などがたくまを襲った。

たくまは、相変わらずの散らかりようだな。と、首を振りながら落ちてきた物の中から最近孤児に寄付された通学用の鞆を取り出し、身なりを整え、髪の毛を無理やり寝かし（たくまは生まれつき髪癖が悪く、いくら髪をといても癖毛は容赦なくたくまの頭の上で跳ねている）そして鞆に推薦状と、筆記用具を入れると、孤児院のみんなにメモを置いて家を出た。

たくまはだらしないほどに大口を開け、目の前に聳え立つ建物を見上げた。そこには、大文字のAとDの文字を、白い翼と黒い翼が囲んでいる紋章が彫られた校門を始め、校門から長々と続く、レンガで出来た道や、道の周りを囲むようにして咲く花、広々とした校庭に並ぶ木々、校庭をどこかの草原かと思わせるような青々とした芝生が校庭を仕切り、道の先にはとても高校とは思えないような美しく、立派な校舎が建っていた。たくまは唾を飲むと、思い切って校門の横にあるベルを鳴らした。しかし、いくら待っても返事はなく、たくまはもう一度ベルを鳴らした。すると、今度は女の人の声が響いた。

「先ほどはすみません。校長達がケンカをしていたものですから。福永たくまさんですね。今、案内役の生徒を送ります。少々お待ちください」

そう言うと、女の人は通信を切った。たくまはこの高校は大丈夫なのかと、首をかしげながら案内をしてくれると言う生徒を待った。

数分して、黒い制服を着た青年がたくまを迎えた。

「こんにちは。僕はルフォ。今日は君の案内をすることになったんだ。よろしくね。たくま君」

「こちらこそよろしくお願いします。ところで、さつき、校長先生たちがケンカをしてたって女の人が言ってたんですけど、ここには校長先生は二人いるんですか」

たくまはルフォに導かれ、レンガの道を歩きながら聞いた。

「この学校は、大きく分けると二つの科目に分かれていて、その一つずつに校長先生がいるってことだよ。ついでに僕は死神科にいるんだよ。天使科の生徒達は白い制服を着てるからね」

ルフォの一言を聞いて、たくまは足を止めた。今なんて言った、と二回もルフォに聞き返してしまうほどの混乱に陥っていた。

「死神と天使。ここは生物研究専門学校って名乗ってるけど、本当はクロノスと言って、魂を汚す悪魔や悪と化した魂を消し、息ある魂を守る死神。迷える人々を光へと導く天使。地上にありながらも、天界の教育をしているところなんだ。生徒の中には、わざわざ天界からやってきた子もいるんだ。簡単に言えば、幽霊」

ルフォは楽しそうにしゃべり続けた。その隣では、頭が真っ白になったたくまが、何も言わずに歩いていった。

その後ルフォは自分の友達や先生の話や、大きな校舎内の中心にある校長室に着くまでしゃべり続け、ついには舌を嚙んでしまった。

「失礼します。福永たくま君を連れてきました。ずいぶんと混乱してるみたいで、一言もしゃべらなかつたんですけど。結構な魔力の持ち主ですよ」

そう言うと、ルフォは校長室に入って来たたくまにウィンクをする
と、校長室から出て行った。たくまは、できれば一人にして欲しく
なかつたが、ルフォがいい人であつたように、きつとこの校長先
生もいい人だと自分に言い聞かせ、何とか心を落ち着かせた。

「よく来てくれました。こんにちは、たくま君。私がこの校長を
勤める、天使・アルテミスです。そのイスに座ってください。今
からもう一人の校長先生が来ますから」

アルテミスはにこやかに言うと、自らお茶を出したり、学校のこと
を話した。

しばらくの間アルテミスとたくまが話していると、校長室のドアが
勢いよく開き、その振動で高く積み上げられていた書類の山はバラ
ンスを崩し、床に散らばつた。たくまはその様子を見てから、ドア
を開けた人物に顔を上げた。

そこには、痛んだフード付きのローブを来た男らしき者が立ってい
て、右手には大きな鎌が握られていた。

たくまは恐れのため息を呑んだ。その姿はまさしく死神、その者
であつた。

「遅れたみたいだな。それにしても、この部屋の散らかり方は俺の
部屋よりもひどいぜ。どうかしたか」

男は大鎌の長柄の部分で肩をばんぽんと叩いていた。

「どう見てもあなたが散らかしたとしか言えないでしょう。早く自

己紹介をしてください。そしてそのフードも脱いでください」

男は面倒くさそうにため息をつく、たくまの横に立って自己紹介を始めた。

「俺は死神科を仕切り、ここの校長でもある。死神・ベヒスだ。お前の力からして、死神科に入学することは決定だな。今後よろしくって所だな、ボサボサ頭君。それから、俺は顔を見せない主義なんだ」

そう言う、ベヒスは部屋を出て行った。

「すみませんね。ベヒスは人をからかうのが好きでね」

「そうですか。あの、アルテミス校長。僕はこういう事は苦手なんです、あなたとベヒス校長先生は人間ではない、ですよ」

アルテミスは少し驚いた顔をしたが、すぐに落ち着いた。そしてどうしてかとたくまに聞いた。

「はつきりとは分りませんが、簡単に言えば魂です。僕たち人間の魂は体と共に鎖でつながれている状態にあります。しかし、先生たちの場合は魂自信が体となっている」

そう言った後、たくまは急いで口をふさいだ。自分でも何を言っていたのかと驚きながら。

その姿を、アルテミスは興味深げに眺めていた。

「人間って言う生き物はね、自分の能力に気づかない方が多いんだよ。たくま君には見えてなくても魂を感じることが出来るみたいだ。

ベヒスの言う通り、たくま君は死神科への入学決定ですね。今日は色々とありすぎて疲れたでしょう。よかったら泊まって行ってください。家には私が電話をしておきます」

「ここに入学しなくちゃいけないんですか」

たくまはテキパキと書類を片付け、電話を探しているアルテミスにコソツと聞いた。

「来たくなければ良いんです。たくま君、これはあなたの人生です。私たちがどうこう出来る問題ではないのです。この学校に来なければ、このまま居座ってかまいません。これは強制ではないので安心してください」

「お金がないと言ったら。どうします」

これにはアルテミスも驚いた。アルテミスは、今までたくさんの子供たちに推薦状を出し、この学校に入学してみないかとたずねた。そのうちの数人は見学に来たときに混乱してしまい、こんな非科学的な学校に入学などするかと、推薦をけった。中には校舎は気に入ったが、勉強内容や、将来に役に立たないなど。推薦状を受け取りはしたが、入学した者はいなかった。しかし、たくまはお金がないから入れないと言い始めた。それはこの学校に入りたいと言言葉でもあった。

「僕は孤児なんです。孤児院にもまだたくさんの孤児たちがいて、あまりお金ありません。この学校は、僕みたいな変わり者にとって打って付けのいい所ですが、お金がなければ意味がないですよね」

「その心配なら無用ですよ。孤児たちには私たち校長が支援します。ですから、心配しないでください」

アルテミスはようやく電話を見つけると、今度はコンセントなどが外れているのに気づき、首をかしげながら元の位置に戻し始めた。

「本当にいいんですか。お金はないし、勉強は出来ませんし。何よりこんな不良みたいな髪をした生徒なんかを受け入れたら、評判が落ちてしまいますよ」

「大丈夫ですよ。この学校は外見でなく、魂を見ますから。それに、カッコイイじゃないですか。死神らしい髪型ですよ。もしも気になるのなら、ベヒスの髪を見てみるといい。彼もたくま君のような癖毛ですから」

そう言うと、アルテミスはようやく電話をかけ始めた。アルテミスが孤児院の管理人さんと話している間、たくまは外を眺めていた。しばらくして、たくまは何かの羽音を聞いたような気がして後ろを振り返った。すると、そこには小さな馬がいた。

馬は白く輝く毛色をしていて、背中には妖精のような羽があった。たくまは目を疑い、一回目を閉じてからもう一度目を開けた。すると、たくまの目には大きな顔がドアップで映された。たくまは驚いたように悲鳴を上げ、座っていたイスから転げ落ちた。

それに気づいたアルテミスは急いで用件を伝え、たくまを起こした。

「すみません。あの子は妖精のパフィン。手紙等を運んでくれるお使い妖精です。ペガサスと違い、羽は妖精ですし、体も小さい。本当は人見知りなんですけどね、たくま君が気に入ったようですね」

アルテミスはパフィンから手紙を受け取ると、たくまにパフィンを

紹介した。

パフィン嬉しそうに校長室を飛び回っている。

「ここって、普通はありえない生き物がいるんですね」

「もちろん。ここでは常識が通用しませんからね。しかしすぐに慣れますよ。さて、たくま君の校長の元へ向かいましょうか。残念ながら、私は天使科の校長なので」

そう言うとアルテミスはたくまとパフィンを連れて、天使科専用の校舎の向かい側にある校舎へ向かった。途中、アルテミスは天使科と死神科の生徒たちのふれあいはあまりなく、二つの校舎の間にある中庭にてふれあえると説明した。

「これが中庭です。この渡り廊下を進めば死神科の校舎の入り口に着きます」

天使科の入り口は、たくまが見る限り極普通の校門だったが、死神科の校門は違った。造りは全く同じなのに、死神科の校門には交差する大きな鎌と、それを覆うようにして黒い翼が描かれていた。アルテミスは巨大な絵に驚くたくまをそっとしとき、入り口にあるベルを鳴らした。すると、校舎から一人の青年がやってきた。

「お待ちしていました。ここからは僕がたくま君を校長室まで案内します」

そう言ったのは、たくまを一番最初に出迎えてくれた死神科の生徒、ルフォだった。

「たくま君、ここからはアルテミス校長は入れないんだ。先生にお

礼を」

ルフォの言葉で我に返ったたくまは、急いで頭を下げた。そして何回もお礼を言うと、ルフォに連れられ死神科の校舎に足を踏み入れた。

死神科の校舎はさっきまでいた職員寮（ここでは教師たち専用の寮があり、中心点にアルテミスの校長室がある。そして、その隣の校舎が天使科の校舎で、この二つは合わせて白い校舎と呼ばれている）とは違い、ほとんどが石造りでミステリアスな感じが漂っていた。

「この校舎は一番古くてね、造りも古いんだ。黒い校舎って呼ばれてるな」

ルフォは校舎の説明をしながらたくまをもう一人の校長、ベヒスの元まで案内した。その途中、何人かの生徒たちとすれ違ったが、その生徒たちはどう見ても半透明だった。

「ついたよ。ここが校長室。なんでここにあるかって言うと、校長が勝手に決めたらしい」

ルフォはドアをノックし、ドアを開け中に入った。たくまもその後続いた。

「やっと来たか。待ちくたびれたぞ」

ベヒスは暇そうに本を読んでいた。相変わらずフードで顔を隠していたものの、さっき会った時よりも落ち着いているようだった。

「先ほどは名乗れないままでしたが、福永たくまと言います。入学

したらよろしくお願いします」

たくまは頭を下げた。

「話は聞いた。確か孤児だつて言つてたな。そこら辺の話はアルテミスに聞いたと思うから、俺たちはここの話でもしてやるか」

ベヒスはルフォにも残るように言うと、二人をソファーに座らせた。

「この学校のことは聞いただろうから、まず最初に死神について教えてやる」

そう言うときベヒスは死神について話し始めた。

死神とは、穢れた魂を抹殺し、その親玉の悪魔を消すために存在している。

ついでに天使は迷える魂。すなわちまだ救える穢れた魂を導くために存在する。天使たちのモットーは「愛を忘れずに」で、死神は愛も何も関係なく自分に課せられた任務を果たす。悪魔は穢れた魂がある限り存在するため、いくら消してもきりがない。そして悪魔にも強い者から弱い者がいて、死神が消えてしまうことも少なくない。だが、死神と言う存在を作り出してくれた神の名の元に、死神は穢れを洗い落とし、美しい世界を取りもどす、または保ち続ける。

しかし、死神は天使と違って特殊な能力を必要とするため、数が少ない。特に天の死神と呼ばれる、一度死んでしまった魂が死神となった死神はベヒス校長ただ一人で、地の死神、息ある魂が死神となった死神も一握りだけ。生徒はたくさんいても、ほとんどは卒業できず、学校に残るか去るように命じられる。死神になれるのはその能力と精神がしっかりと鍛えられた者のみ。ボサボサ頭には無理だな。

ベヒスは最後の言葉をボソツと言うと、机の上に溜まった書類をあまり始めた。

「最後のボサボサ頭って言うの、やめてくれません。結構気にしてるんですから」

「そこは諦めた方がいいと思うよ、たくま君。それから、これはこの制服で、今は冬服を着ている。で、こっちのローブは外出の時に着なければ着て、任務の時には絶対に着ないといけない、死神科の象徴みたいなものだよ」

ルフォは制服と黒一色のローブをたくまに渡した。その間に、ベヒスは入学願書を書類の山から引っ張り出し、たくまに渡した。

「ずいぶんと変わった願書ですね。親のサインと子のサインだけでいいんですか」

「ここは普通の学校じゃないからな。特に死神科は天使科と違って常識はずれだ。別にそんな紙切れなくてもいいんだがね」

ベヒスが書類の愚痴を言っている間、たくまは保護者の欄を悲しげに見ていた。

「保護者の事は気にするな。俺がお前の保護者を受け持つ」

ベヒスはたくまの心を読んだかのように、いつもの人をからかう声と違う、どこか優しい声でつぶやいた。

「少くないんだぜ。死神の能力は人それぞれだからな。気味が悪いって言って捨てられた生徒は生徒の四分の一。そういう生徒は、

俺がすべて引き取ってる。と言っても、ほとんどの生徒は卒業できずにこの学校を出て行ったけどな」

そう言いながらベヒスは保護者の欄に自分の名前を書き込んだ。そしてたくまにサインを書かせると、何かの名前をつぶやいた。すると、どこからか黒い馬の妖精が出てきた。

「こいつはロフィン。俺の使い魔だ」

たくまは、ロフィンがアルテミスの下にいたパフィンに似ていると呟いた。

「そりやそうだろ。アルテミス校長のお使い妖精と、ベヒス校長の使い魔は属性は違うけど一人の神によって作り出された生き物なんだから」

ルフォはテキパキと説明した。それを聞いたたくまは、その属性とは何かと聞いた。

たくまの質問はまるで雪崩だな。そう思いながらルフォは一つ一つ丁寧に説明した。

「天使と死神は、身近なもので例えると光と闇。そしてその両性を持つ力を光属性と闇属性に分けられるんだ。でも時々天使が闇属性で、死神が光属性を持つこともあるんだけど、アルテミス校長の妖精は光属性その物を形にした妖精で、ベヒス校長の使い魔は闇属性その物から出来ている。だけど元はと言えば、闇属性は悪魔の力の一つなんだ。それを神が死神にたくし、誕生した力。そういうことでパフィンとロフィンは正反対の属性を持っているんだ。性格もぜんぜん違うし」

「結局は闇が影で世界を支え、光が世界を照らし出す。そういう力を二つに分けただけって訳だ。」

「ついでに僕は普通に闇属性だよ。でも、たくまは光の属性と闇の属性、どっちも持つてみたいだね。と言うよりも光属性だったのに、途中から闇が混ざったみたいって言った方が良いのかも知れないけど」

ルフォは首をかしげながらたくまを見ると、すぐにベヒスの方に向き直った。

ベヒスは、ルフォの言う通りだ。だが、そんな事はあんまり関係ない。バランスも取れているし、問題ないだろうと告げると、壁に立てかけてあった大鎌を手にとった。

「そういうことで、ロフィンは早速アルテミスの所へ行き、書類を提出。ボサボサ頭は腕を出せ。少し血を分けてもらうぞ」

たくまは鋭く光る刃を見て、即座にドアへと向かった。が、扉の前ではルフォが待ち構えていて、たくまを捕まえると無理やり校長の前まで連れてきた。

「落ち着けよ。俺は腕をもらうなんて一言も言っていないぜ。ただ少しだけ血を分けるって言ったんだ」

だったらその鎌はなんなんだよ。そんな物を振り落としたら腕がなくなるのは当然だろ。と叫びながらルフォの手元で暴れた。

「これは気分的に持つてるだけで、血を採取するのはこの機械だ」
そう言いながら、ベヒスはローブのポケットから小さな鉄の箱を取

り出した。

「お前は死神が武器を持つてることくらい知ってるよな。それは普段は触れることさえ出来ない魂を消すために存在してる。だが、そんな大事をする武器はたいいていの場合、自分よりも大きい。たとえば俺の鎌の柄の部分、知つての通りおれの身長を超えている。ルフォは普通に鞭だが、そう言う物騒なものを四六始終持つてたら怪しまれるだろ。そこで、死神科にいた天才が作り出したのが変形型武装生物。神の言葉でロウファンだ」

ベヒスはそう言うつとルフォを見た。ルフォはそれを合図と見なし、窓を開け、指笛を短く三回吹いた。するとどこからか、立派なハゲタカが校長室に舞い降りた。

「これが僕のロウファン、ハドリーだ」

ルフォはハドリーの頭を撫でながら自慢げに紹介した。しばらくの間ルフォはハドリーに夢中になっていて、ベヒスが咳払いするまで撫で続けた。

「すみません。たくま君、よく見といてね。ハドリー、武器型」

ルフォが勢いよく武器型と言うつと、ハドリーは眩い光に包まれ、光がやんだころには長い鞭となっていた。それを見たたくまは言葉を失った。

「こんな感じだ。ロウファンの変形は武器型、獣型、そして大型の生き物の場合は野獣方もある。野獣方まであるロウファンは、結局目立つから普段は獣型といて、最低でも猫くらいの大きさでいる。そのハゲタカも野獣型があるが、大きくなると色々と面倒だからそれは後で見せてもらえ」

そう言うと、ベヒスは忠告なしに鉄の箱をたくまの腕に投げた。すると、箱は鋭い針のような牙が生えた口を開き、たくまの腕にかぶりついた。その痛みにかくまは思わず、痛いと呼び声をあげてしまった。

「そこまで叫ぶ事はないだろ。耳がなくなるぞ」

ベヒスは耳を両手で塞ぎながら怒鳴った。

たくまは半泣き顔でベヒスを睨んだ。しかし何かを言おうとする前に、たくまの血を吸った鉄の箱が、たくまの目の先で爆発し、たくまはソファァーから吹き飛ばされ、それと同時に大きな物がたくまの上に着地した。

「おいボサボサ。大丈夫か」

さすがに驚いたベヒスは、たくまが吹き飛ばされた場所に駆けつけた。

たくまの上にはヒグマ並みの巨体を持つ虎のような生き物が座っていた。

「おいおい。これはデカ過ぎるだろ。よりによって古代生物が出てくるなんてな」

ベヒスは巨大な虎に踏まれ、気絶しているたくまの横にしゃがむと、最初にたくまの息を確認し、巨大な虎を見上げた。

虎はぴくりとも動かず、ただ自分の足元で伸びているたくまを見つめていた。そしてため息をつく、たくまの上から降り、体を猫と同じくらいの大きさまで縮めた。

「ワシが乗った位で気絶するとは情けない。起きろ」

小さくなった虎は、小さくなった手でたくまを殴った。しかしその威力は巨大な姿の時と同じようで、たくまは瞬く間に隣の部屋へ殴り飛ばされてしまった。

「まだまだこの体を使いこなせないか。おいたくま、大丈夫か」

虎は隣の部屋で頭を押さえ、呻き声を上げているたくまに駆け寄った。そして自分はたくまのロウファンだと告げた。

「ベヒス校長。あれってサーベルタイガーですよ。それもヒグマみたいに巨大な」

たくまと話すサーベルタイガーを見て、ルフォはベヒスにつぶやいた。

「そうだな。光と闇の属性が混ざり合うと、色々と大変だとは聞いていたが、まさか古代生物が出てくるとはな」

ベヒスは埃を叩きながら立ち上がると、たくまとサーベルタイガーを校長室に呼び戻し、ソファアに座らせた。

「ワシの名はロドノステラ。今日からお前のロウファンだ」

「名前って、主がつけるんじゃないっけ。その前に生まれてすぐに主を踏み潰したり、殴ったりするのって異常中の異常ですよ」

ルフォは大人しくたくまの横に座るロウファンを見ながら言った。

「名はワシが勝手につけた。高貴なワシにはこれくらい立派な名が似合うだろ」

ロドノステトラは胸を張って言った。

「普通のロウファンと違って知能も高いな。ロド、武器型になってみる」

「ここの校長か。何ゆえ顔を隠している。まあ、ワシの知ったことではないがな」

そう言うと、ロドノステトラは眩い光を放ち一瞬にして姿を変えた。光が収まったときには武器となったロドノステトラがたくまの手に収まっていた。

たくまは自分が手にしている武器を見てあつと声を漏らした。それは死神が持つには美しすぎると言った、確かに高貴な武器だった。まっすぐ伸びる長柄は、銀色に輝き、長柄の上半部分には虎のような模様が描かれている。模様の始まりと終わりの先には真っ赤な二つの宝石が埋められていた。そして長柄の先端には、鎌のように横に伸び、先端が緩やかなカーブを描いた刃が上下に二枚ついていた。

それを見たルフォは、たぶん二枚の刃はサーベルタイガーの特徴、長く鋭い牙を現しているのだと悟った。そして武器の中で何よりも目立つのが二枚の刃の色だった。下の少し短めの刃はごく普通に銀色だが、上に位置する長い刃は、血を思わせるほどの赤だった。

「いまどき大鎌が出てくるとは、ボサボサ頭はこの学校の常識をすべて狂わせてるな」

ベヒスはたくまの武器に興味心身で調べながらつぶやいた。そして、

下の刃を銀の牙、上の刃を赤い牙と勝手に名づけ、たくまを立たせてみた。武器はたくまの身長を越していて、大鎌としてはちょうどいい長さだった。

「ベヒス校長、これってどちらかと言うとオオハシの嘴みたいなんですけど」

たくまが、オオハシと言う南の島に生息する鮮やかな色をした鳥を思い浮かべながら言うと、武器はたちまち小さなサーベルタイガーの姿に戻り、二本の牙を思い切りたくまの腕に突き刺した。たくまは再び叫び声をあげ、校長室で暴れ回った。

「確かにそうだ。遠くから見ればオオハシの嘴だな。だがちゃんと虎の模様が長柄に装飾してあったじゃないか」

ベヒスはロドノステトラをたくまから引き離すと、簡単に最後の説明を始めた。

「これからお前たちは死神科の生徒の一組、たくまとロドノステトラだ。二人は常に行動をとみにし、お互いを信じあう。ついでに言うておくが、こいつの今の姿が獣型。最初に出てきたときの大きな姿が野獣型だ。分ったらさっさと部屋へ行って静かにしてる」

そう言うときベヒスはルフォと相棒のハドリー、たくまとロドノステトラを校長室から追い出した。

「そういうことだ。これからはお前に付き合ってやる」

そう言うときロドノステトラはたくまの肩に飛び乗り、大人しくなった。

「僕が主なんだけどね。でも、よろしく頼むよ。ロド」

その後たくまとロドノステトラ、ルフォとハドリーはどこかに開いている寮部屋はないかと学校をさまよい、一人の青年がたくまにベッドを貸してくれることになった。

（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます！！

長いすよね？ 分かってます。でも捨てるのはイヤだなあ・・・
という事で投票しました！

感想、いただければ白猫は天に昇れます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0213o/>

天死専門学校

2010年10月11日14時37分発行